

講演一

古代の東アジアの動向と鞠智城

講演者紹介

酒寄 雅志（さかより まさし）

一橋大学大学院博士課程修了。

現在、國學院大學栃木短期大学日本文化学科教授、
栃木県文化財保護審議会委員なども兼務。

専門は日本古代史、東北アジア史。

・講演一 「古代の東アジアの動向と鞠智城」

酒寄 雅志（國學院大學栃木短期大学教授）

はじめに

こんにちは。酒寄と言います。今日は「古代の東アジアの動向と鞠智城」というタイトルでお話をさせていた
だきます。

鞠智城を考える時に、いくつかの問題点があると思っています。①どんな事情で築造されたか。②なぜ菊池と
いう地に造られたのか。③誰か造ったのか。④どういう変遷と事情があつたのかの解明が基本的な課題となる
と思います。それらを私なりに考えてみたいと思います。

一、七世紀後半の東アジアの動向と鞠智城―白村江の敗戦と鞠智城―

『続日本紀』文武二年（六九八）五月甲申（二十五日）条に、「大宰府をして大野・基肆・鞠智の三城を繕い治
めしむ」と、修築の記事が初めて出てきます。築城の記事ではなく、既に造られていたものが修築されたのが文
武天皇二年ということですから。それ以前は、大野城や基肆城などは天智四年（六六五）、いわゆる白村江の戦い
以降に造られ、それも百済人の指導のもとに造られたことは皆さんもよくご存知のことと思います。鞠智城の築城



写真 11 酒寄雅志氏

も、大野・基肆の二つの城とともに修築されていますので、この頃あたりに考えられると思います。

当時の国際情勢はどうかと言いますと、これも皆さんご存知だと思いますが、朝鮮半島では三国が並び立っており、高句麗が唐との戦いを繰り返していました。隋の煬帝の時には高句麗征討が行われていますので、隋以来のこととなります。その後、新羅と唐が互いに手を組んで、高句麗との戦いも繰り返していきます。日本、当時の「倭」の中大兄皇子は百済寄りの外交を行います。倭と百済は長らく両国の関係を強く維持してきました。石上神宮の七支刀などからも、四世紀後半代に百済との結びつきが強いことがわかります。

ところが六五九年に、唐に行った倭の遣唐使が抑留されています。それは来年百済を攻めるので、帰国させないということです。唐は「海東の政有らん」と言っています。その通り唐は新羅とともに百済を攻め、六六〇年三月に、百済の義慈王と王子の扶余隆が唐に降伏し、百済が滅亡します。

その後、倭は百済の遺臣である鬼室福信の要請や、倭に人質として余豊璋という百済の王子がいましたので、その王子を押し立てて百済の復興を目指して、大軍を送って唐と戦うこととなります。そして斉明天皇をはじめ中大兄皇子たちが、九州の朝倉宮に入ります。白村江では、皆さんよくご存知のように、「気象を観ずして」という戦況の判断が非常に甘かったのだと思いますが、猪突猛進的な戦いを繰り返して、「朴市田来津」^{（ネリノタキ）}が、「天に仰ぎて誓い、齒を切りて憤り、数十人を殺しつ」とあります。そして結局こ

の人も亡くなってしまいましたが、百済王の余豊璋は数人と船に乗って高句麗に逃げ去ります。倭としてはその後の対応が大変なわけです。

白村江の戦いでは、『旧唐書』などをみますと、「煙焰天に漲り、海水みな赤し」というように大敗を喫したことがわかります。そしてこれをきっかけにして大宰府が成立することになったと思います。筑紫大宰府の佐官だった筑紫史益ですが、二九年前に大宰府ができたと言っています。これは六九一年の記録ですので、六六三年頃に成立したものと思います。筑紫大宰府というのは海边防備が重要な任務だろうと思いますが、九州の行政、外交、防衛とすべてを担う最前線なっています。特に白村江の戦いの敗北で、防人や烽をはじめ水城も置かれず。そして長門、大野や基肄にも城が造られ、さらに対馬の金田、讃岐の屋島、大和の高安と相次いで西日本に城が造られます。最近では、神籠石系の山城の新たな発見も続いているかと思っています。唐原山の山城なのですが、鬼ノ城なども造られます。そして近江大津へ都を移したのもそうした一環だろうと思います。ちょうど逢坂山の峠を越えた琵琶湖の湖畔に引きこもってしまうように都を遷すのもそうした事情によるのだろうと思います。

そして鞠智城ですが、発掘成果の第一期に当たる七世紀第3四半期から第4四半期に、白村江の戦い以降の防衛体制が整備される過程で築造されたと考えざるを得ないと思います。有明海からの侵入に備えた可能性は高いと思います。筑後国府も有明海をかなり意識して造られていると言いますので、有明海が外敵の重要な侵入路と考えていたのだろうと思います。鞠智城は海からかなり入った平野に突き出た台地の突端にあるわけですが、興味深い場所に立地していると思います。築城した主体は、百済系の菩薩立像が発掘されていることから、百済あ

るいは朝鮮系の人々とするのが妥当かと思えます。この写真は扶余で出土している統一新羅時代の小さな仏像です。百済の弥勒寺からも小さな金銅仏が出ています。こうした類例を集めて検討をする必要はあるかと思えます。

それから鞠智城には八角形の建物群がありますが、非常に不思議な建物で、時期的には少し後になるのかも知れませんが、新羅の二聖山城に同様の建物があります。私はちょうど二聖山城の八角形の建物が発掘されている時に現場を見ました。それと中国の集安にある高句麗の丸都山城にも共通する建物があるかと思えます。また群馬県の三軒屋という遺跡からも八角形の建物が出ています。私も発掘している時に行きましたが、なぜ八角形なのかよくわかりません。天武天皇陵なども八角形ですけれども、八角形に何か重要な意味があるのかもしれない。こうした点を考慮すると、鞠智城は朝鮮系の渡来人によって国家的な事業として造られたというように考えて良いのだろうと思えます。

二、七世紀末の東アジアの動向と鞠智城

史料上に鞠智城が登場するのは、先ほども申しましたように文武天皇二年（六九八）ですが、修繕をしたという記事として出てきます。では、この六九八年という年に、なぜ修繕をしているのかということを考えてみようと思います。まず当時の朝鮮半島の動向を考えると、百済は既に滅び、白村江の戦いも終わりました。六六八年には高句麗は唐に滅ぼされます。倭は唐に使者を派遣して高句麗の平定を祝っています。この後の倭の外交は新羅との外交に限定されていくことになり、遣唐使もこの後、三〇年間ほど派遣されません。しかし高句麗が滅び

ると、唐は朝鮮半島の支配に乗り出してきまして、今の平壤に朝鮮半島を支配する安東都護府わんとどうとどが置かれることになります。唐は朝鮮半島を直接統治することになりますが、そうしますと今度はその朝鮮半島の人々は、この唐を追いつくそうとします。軍事的な侵略をしてきた者に対して、それを何とか駆逐しようという運動が起こつてきます。六七六年にその新羅の抵抗によって、安東都護府は遼東城に移転することになります。平壤からかなり北の瀋陽の南側の遼陽です。そうなりますと、新羅が朝鮮半島に残る唯一の国になります。しかしながら、唐は朝鮮半島の支配を諦めておらず、その後どうやって支配していくかを考えています。その一方で滅びたはずの高句麗から使節が、何度も倭に來ています。六七一、六七二、六七五、六七六年、さらに六七九、六八〇、六八二年に來ます。なぜ高句麗が倭に來るのかというと、朝鮮半島では高句麗の復活運動が続いていたのです。

劍牟岑という高句麗の遺臣が、元の高句麗王の高藏の外孫安舜を立てて武装蜂起し、高句麗の復活を図りました。後にこの安舜が、擁立した劍牟岑を殺して新羅に逃走しましたので、新羅はこの安舜を自分の支配下に置き、高句麗を復活させたことにします。この頃、滅びたはずの百済王が倭にもいるのです。八世紀には、百済王敬福という人物がいますけれども、かつて存在した百済の王が日本国内にいて、その王の上に日本の天皇が君臨するということをしていますが、同じようなことが新羅でもあったのだらうと思います。新羅は安舜を高句麗王として復活させて、新羅王の支配下に置くのです。しかしこの安舜も逃走します。

則天武后の宰相の狄仁傑てきにんけつが、「高氏を復して君長と為す」と言っています。高句麗は一旦滅びたけれども、朝鮮半島の支配はやはり地元の人間を復活させたほうがいいだらう、そして新羅に対抗させようと考えたのだらう

と思います。「君長と為す」ということで、何度か高句麗の王を復活させて高句麗王にします。唐に下ったはずの高蔵を「遼東州都督・朝鮮王」に封じ、海東の国王にしたということです。ところが高蔵は、靺鞨もくかくという中国・東北地方に居住する人たちと通じて唐に反し、捕まって四川省に流されます。新羅に下った安舜のように高句麗を復活させたのではなく、唐が復活させた高句麗ということになります。しかし一回目は失敗します。さらに六八六年に高蔵の孫の宝元を朝鮮郡王に任じますが、これもうまく統治ができません。そして六九八年、高蔵の子供の徳武を安東都督に任じて、本蕃、要するに高句麗の統治をさせますが、これもうまくいきません。これで完全に高句麗が滅びたことになります。そしてこの高句麗の末裔として復活させたのが、「渤海」だと思っています。渤海に唐が高句麗の末裔として中国東北地方の支配を委ねたと私は思いますが、高句麗という国名は、ここで絶えることになります。

しかしそれだけではなくて、六九六年に契丹族の李尽忠が遼寧省朝陽というところで反乱を起こしています。この混乱の間に、当時振国と言いますが、後の「渤海」が興ることになります。

こういう情報が日本にも入ってきていたと思います。その情報源は、遣唐使として中国へ渡った人たち、あるいは白村江の戦いで捕虜になった人たちです。たとえば七世紀末に遣唐留学生の土師宿禰甥とか白猪史宝然が帰ってきますし、百済の役で捕虜になっていた筑紫三宅連得許も帰ってきます。六九六年には肥後国皮石郡の壬生諸石も帰ってきていますから、こういう人たちから情報を聞いて、東アジアあるいは東北アジアが混乱しているということは認識していたのだらうと思います。

そしてもうひとつ大事なことは、六九八年に鞠智城とともに三野や稲積城が修築されており、これが日向や大隅あたりだの城だとすれば、隼人に対置するような城として修築されたと思います。つまり隼人に対して稲積とか三野とともに鞠智城も修築された可能性は大きいと思います。この頃、日本は南島に領域を拡大しようとしていて覓国くによきをしています。つまり新たに国を覓もとめているのです。それに対して薩摩とか多櫛で反乱が起こっています。最もヒートアップするのが七二〇年で、陽侯麻呂という大隅国守が殺されるということがあり、大伴旅人、すなわち大伴家持のお父さんが、征隼人持節大將軍になって軍事行動を起こします。『和名類聚抄』という史料に、薩摩国高木郡の中に肥後国の郡名がいくつか出てきますので、この戦いに肥後国も大きく関わっていただろうと思います。そうした時期が鞠智城の第2期に該当します。この時期に建物がコ字型に配置されているのですが、その配置はだいたいの律令制下の官衙かんがに多いので、鞠智城にも城司の官衙が置かれた可能性もあるのではないかと考えるわけです。またこの時期は土器が非常に多く出てきていて、鞠智城が一番盛んだったイメージを持つことができます。そうなりますと、東北アジアの混乱に対する危機感と隼人への対策上、北九州の山城の重要性を再認識して、鞠智城も修繕したものと思われれます。

一般的に六七〇年以降はどちらかと言うと、新羅との関係あるいは朝鮮との関係は安定しており国際的な緊張がないと思っっている方が多いのですが、そうではなくて、東北アジアの混乱は継続しており、また隼人政策上も鞠智城というのは非常に重要な地位を占めていたものと思われれます。だから修繕をしたのだろうと考えるわけです。

三、八世紀の東アジアの動向と鞠智城

八世紀に入りますと、日本と新羅の関係はずっと緊張を増していきます。七二二年には、新羅では日本の賊路を遮断するために毛伐郡城が築かれています。慶州、つまり新羅の都の南、蔚山へ向かう関隘に関門城、これが毛伐郡城になります。さらに七三一年には、日本の兵船が東辺を襲うという記事が『三国史記』に残っています。

さらに日本の天平六年（七三四）の「出雲国計会帳」が正倉院にあります。それによると七三二年から七三四年に節度使体制が日本海沿岸にとられたことがみえます。山陰、西海の軍事体制を強化しているということから、やはり新羅との関係が良くないことを物語ります。また七三七年には、新羅征討が議論されています。しかし藤原四兄弟が亡くなりますので立ち消えになりますが、日本と新羅との関係が非常に悪化しつつあるということがわかります。一時期だけ関係が良い時があります。七五二年に、新羅の王子金泰廉が七〇〇人ぐらいの使節団を連れて来日します。この時だけ両国の関係は改善します。東大寺の大仏の開眼会の直後のことで、彼らは東大寺の大仏を見に来ている可能性があります。また貿易を積極的に行っているのが、「鳥毛立女の屏風」の下貼文書からうかがえます。これは「買新羅物解」と言いまして、新羅の物品を購入しているリストが屏風の下に貼られているのです。日羅関係に雪解が一時期ありますが、それも束の間で、七五三年には唐の玄宗皇帝の前で日本と新羅の遣唐使が席次争いをします。今の国連の議場のどこに座るかで争っているみたいなのですが、長安城の含元殿で並ぶ位置を争っています。西側の吐蕃という国の下に日本、新羅は東側で日本よりも上に位置づけられています。新羅は東の横綱みたいな位置にあるわけです。しかし新羅は日本に朝貢する国なのだから、日本

のほうが下にいるのはおかしいと大伴古麻呂が抗議をして席を変更させたのです。これは新羅にとっては大変な屈辱で、その年の八月に「日本国使至る。慢して無礼」と言つて、新羅に來た日本の外交使節に新羅王が会いませんでした。一方、大使の小野田守は、新羅はとんでもない無礼な国だと言つて、両国が対立していたことがわかります。そうして藤原仲麻呂の新羅征討という軍事行動に発展していきます。「新羅を討たん」「三年の内に功を成さしむ」と、三年後を目指して新羅征討をするということで、吉備真備らを中心にして準備が進んでいきます。その中で注目すべきは、吉備真備が九州博多の西側に怡土城というのを造っていることです。糸島市の高祖山というところで、城壁が今でも残っています。糸島半島の古い地形は東側が湾になっていましたが、九州大学の移転にあたって元岡遺跡という遺跡を発掘したところ、大量の製鉄遺跡が発見されました。現在、その近くに周船寺せんしという地名がありますが、古くは大宰府の主船司といわれる軍船を集める場所だったと思います。

そして怡土城ですが、新羅を攻めるための兵站を整える城だろうと私は考えています。当時、新羅との関係は良くありませんから、その緊張に備えて怡土城が造られます。そして新羅征討の計画が発案されますと、怡土城が非常に重要視されます。では、新羅征討計画は実効されたのかと言うと、そうした事実はありません。七六二年十一月に、香椎廟に奉幣をして新羅を討つと報告したところで終わってしまい、何も記録に残っていません。藤原仲麻呂はその後、道鏡と争つて反乱を起こして亡くなり、新羅征討は沙汰止みになります。そこで新羅との関係は改善されたのかというと、この後、新羅との公式な外交関係は断絶してしまいます。

一方、大宰府は七六五年に水城を修復しています。水城を修理するということは、相変わらず新羅との関係は

良くないことを物語ります。そうした時期が鞠智城の第三期にあたります。その頃の鞠智城に関する史料はありませんが、怡土城や大宰府の後背にあつて、新羅征討の食料などの物資の備蓄をする礎石建物が造られます。重いものを入れても耐えられるような礎石建物を造るのだらうと考えていますし、城内に「佐官どん」や「少監どん」という地名も、そうした時期の名残だろうと思います。

鞠智城は大宰府の管轄下にあつたのかもしれませんが、そしてもう一つ考えておきたいのは、肥後国司などによる官物の不正使用・蓄財により、倉の中に十分な米が入っていないことがありますと、隠蔽工作として倉を焼いたりします。よく関東では正倉神火しょうそうじんかと言いまして、倉に雷が落ちて焼けてしまうという記録があります。それは役人の不正の隠蔽です。雷のせいにするのです。神様が怒って雷を落としたということです。そういう可能性もあるかもしれません。焼け米はかなり城内からも出ていますので、そうしたことに関係するかもしれません。

四、九世紀の東アジアの動向と鞠智城

最後に九世紀から十世紀の鞠智城をみると、この時期には鞠智城の兵庫が鳴り、さらに不動倉も焼けています。不動倉というのは本来備蓄用の米倉ですが、その米は国司などが奪取したのか、郡司が取ったのかはわかりませんが、その隠蔽工作をしたのかもしれませんが。

この時期、あちらこちらで庫が鳴動しています。あんまり良い兆候を示すものではありません。その倉が鳴るにあたって、東アジアの動向をみておきたいと思います。九世紀前半は朝鮮半島では張保皐が活躍する時期でも

あります。張保臯は最終的には反乱を起こして殺されて乱は収束しますが、張保臯は青海鎮に陣取って、貿易あるいは奴隷の売買を阻止するために青海鎮大使になります。そこは韓国全羅南道の島で莞島かんドと言います。

この張保臯は中国の山東半島に赤山法華院と言って、日本の慈覚大師円仁も世話になる寺を創った人でもあります。いわゆる中国から東シナ海一体の新羅人ネットワークを作って貿易を積極的にして、日本との外交もしようとなりました。しかし日本は、「人臣に境外の交わりなし」、いわゆる臣下とは外交関係を持たないと言って拒否します。まして張保臯は反乱を起こして殺されていますから、新羅への恐怖感がつのります。新羅は「常に奸心を懷き、苞茅を貢ぜず」と、いつも商賈に事寄せて日本の消息を窺っているという被害妄想的な対外意識が出てきます。いわゆる新羅に対しての排外的な態度を示すようになるのです。それは、新羅に対する脅威の裏返しだと思います。

新羅に対する脅威は、色々な形で現実のものになります。少し後になりますが、八六九年には、豊前国の年貢を運んできた船を新羅の海賊が襲って略奪をするという事件が起きます。新羅の海賊が博多津に来襲するのです。が、そうしますと日本側は、「国威を損辱すること、之を往古に求むるに、未だ前聞有らず」と、今まで聞いたこともないような恥ずかしいことである。「後來に残すに、当に面目無かるべし」と、非常に憤りをもって対応します。実はこうした新羅の動向が、応天門の変、伴善男が応天門に火を付けたという『伴大納言絵巻』でご存知かと思いますが、この事件も実は「隣国の兵、来たりて窺う」とことと関係しているのだと陰陽寮が占います。同じことがあちこちで起こります。若狭国では、「印・公文を納める庫并びに兵庫鳴る」と言っています。そ

れも「遠国の人当に來投有るべし」と、遠い国の人がやって来るかもしれないということと関連づけます。また「新羅の賊兵、常に間隙を窺う災変」という占いが出ます。新羅が襲ってくるかもしれないという恐怖感が常にあり、伯耆 出雲、石見、隱岐、長門諸国は新羅に近いので、常に警備をしていなければならないというわけです。もうひとつは、「賊心を調伏」することを祈って經典を読むのです。この場合は最勝王經ですが、転読をして御敵調伏をしようというのです。どこか神がかつてくるわけですが、実際に色々なことが起こります。たとえば肥前国基肄郡の擬大領の山春永が、新羅人と結んで対馬を奪取しようとしています。また兵弩の器、機械を作る術を新羅に行って習った人が、対馬を取ろうとしていると言います。また隱岐国の浪人ですが、新羅人とともに謀反を企てたともあります。これは誣告で、あることないこと言ったということです。さらには「新羅国王と通じて国家を害せんと欲す」というように、新羅に対する不信感がますます強くなります。

そして大宰府から大鳥が兵庫の上に集まっていると報告があります。鳥が集まったことを占うと、「隣国の兵あらん」と新羅のせいになります。しまいには、「我々は神国だから戦わなくても勝てる」とまで言います。「然れども我が日本朝は所謂神明の国なり」、だから「何の兵寇近づき来るべし」と、新羅が攻めて来られるわけはないのです。「神国思想」というのは、この頃から出てくるということになります。その後、遣唐使に任命された菅原道真が中国唐へ行くのを止めますが、新羅の海賊が横行しているということを、止める理由の一つにあげています。確かに八九四年に新羅の賊が襲来したという報告があります。当時、新羅では非常な不作で、新羅人たちが日本列島を襲うことは十分考えられるのです。

こうした時期が鞠智城の四期、五期にあたるものと思います。礎石建物が大型化してきますが、段々衰微してくる状況にあると思います。池ノ尾のあたりが廃絶になるというのもこの時期だろうと思います。しかしここで考えておきたいのは、まったくなくなっただけではなく、いくつかの大型建物や倉庫群などあるので、この地域は菊池郡の郡家、郡の役所の倉庫群として利用された可能性もあるかもしれないと思います。そうした倉庫群の兵庫が鳴るということは、鞠智城というのが元々対外的な軍事拠点であったので、そうした対外的緊張に備えるようにと警鐘を鳴らしているのかもしれませんが。兵庫が鳴っている状況は、日本中のあちこちで起こっています。先ほども述べましたが、八六六年に若狭国では、遠国の人、あるいは隣兵が様子を窺うというようなことで、朝鮮半島、つまり新羅に対する恐怖心が続いていることがよくわかります。こうしたことが度重なり新羅に対する脅威の現れとして「兵庫が鳴る」ということになっていくのではないかと思います。

おわりに

最後にまとめます。鞠智城がどういう事情で築造されたかと言うと、やはり契機は百済救援の失敗以降の国内防衛体制の充実と思われます。そして、なぜこういう場所に造られたかと言うと、水城、大野城、基肄城の後詰め、あるいは有明海の侵入ルート遮断というのが当初の目的だろうと思います。誰が築造したかというのはわかりませんが、おそらく国家が監督したことは間違いないだろうと思います。しかも朝鮮系の渡来人が関与したものと考えられます。

そしてもう一つ大事なことは、考古学的な成果が段々と集積されてきていますので、その五期の変遷と対応したような東北アジアの動向、それから隼人対策などの国内の事情、日本の対外意識、そうしたものを総合的に考えて鞠智城を見直してみると、また新たな地平が見えてくるのではないかというように思われます。

ご清聴ありがとうございました。